

「第 11 回 TSR 総合調査」報告書

【概要版】

教学 IR 推進部会 TSR 総合調査 WG

(EM 研究所分析)

令和 7 年 8 月～令和 8 年 6 月調査



令和 8 (2026) 年 6 月

1 はじめに ー第 11 回 TSR 総合調査報告書完成にあたりー

学長 神達 知純

ここに第 11 回 TSR 総合調査報告書をお届けします。

本報告書は令和 7 年度に実施した第 11 回 TSR 総合調査の結果を報告するものです。第 11 回調査では、大正大学在学生、大正大学大学院生、企業を対象とする調査を実施しました。結果の詳細につきましては本報告書の「概要」「結果」をご参照ください。

大学の教学マネジメントには、その基盤として情報を継続的に収集・分析し、教育改善や方針決定に活かす体制が不可欠です。教学 IR はその中核的な役割を担うものであり、本学においても EM 研究所を中心として各種データの収集・分析を進めてきました。TSR 総合調査もその重要な取り組みの一つであり、これまで教育の質保証やカリキュラム改善、学生支援の充実に活用されてきました。そして、TSR 総合調査の結果は、学部・学科、研究科・専攻が自らの教育活動や学生支援の状況を点検・評価する際の KPI としても位置付けられています。調査結果をもとに学生の学修状況、成長実感、満足度、進路意識等を確認し、現状の把握、課題の分析、改善方策の検討へとつなげています。

また、令和 2 年度に学長を部会長とする「教学 IR 推進部会」を設置し、以来、教学 IR による教学運営体制をより一層強化してまいりました。

近年、大学教育においては学修者本位の教育への転換が求められています。その中で重要となるのが、学生一人ひとりの学修成果を適切に把握し、成長を支援することです。本学では建学の理念に基づく学力観として「『4つの人となる』ための 10 の力」（以下「10 の力」という）を定め、その可視化に全学的に取り組んできました。

令和 7 年度は、その取り組みをさらに前進させ、「10 の力」の達成状況を学生自身が確認できる学修成果可視化システムの整備を進めてまいりました。現在、運用開始に向けた準備を進めており、今秋から本格的な活用を開始する予定です。これにより、学生は自身の成長を振り返りながら学びを主体的に設計し、教職員は教育改善に活かすことができるようになります。

この取り組みを進める中で、私たちは改めて「可視化とは何か」という問いに向き合うことになりました。学修成果を把握するためには一定の指標や数値が必要です。しかしながら、学生の成長は必ずしも数値だけで表現できるものではありません。

それでは、なぜ私たちは可視化に取り組むのでしょうか。それは大学が学生を評価するためではなく、学生自身が自らの成長を振り返り、次の学びへとつなげるためです。本学が目指すのは、自ら学びとキャリアをデザインすることのできる「自律的学修者」の育成です。今秋から運用を開始する学修成果可視化システムも、そのための重要な基盤として位置付けています。

教学 IR もまた、単にデータを集めるための仕組みではありません。学生の成長と大学の教育改善を結びつける基盤として機能することが期待されています。本報告書が、そのた

めの重要な資料として活用され、本学の教育のさらなる発展につながることを願っています。

最後になりますが、本調査にご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。今後とも本学の教育と教学 IR の取り組みに、変わらぬご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

*なお、これまでの TSR 総合調査の結果と分析については、大学ホームページにて公開しておりますので、併せてご参照ください。

<https://www.tais.ac.jp/guide/estimation/#info04>

2 第 11 回 TSR 総合調査結果の概要

第 11 回 TSR 総合調査では、調査対象とする本学のステークホルダーを、本学在学生（学部生）、本学大学院生、本学卒業生、企業とした。

在学生（学部生）調査については、第 9 回調査以降ウェブ方式による調査のみで実施している。各学科事務室等の協力を得るなど、例年通りの努力を重ねたことで、回答率は 64.6%と前回調査より 5.3 ポイント上昇した。

大学院生調査は、第 9 回調査より本格実施を開始した。調査方法も前年度までの第 10 回調査と同様に、在学生（学部生）調査とも同様の方法であるが、ウェブ方式による調査のみで実施した。回答率は 33.3%と 5.1 ポイント下降した。

企業調査については、本学卒業生の就職先である企業等を対象とし、第 10 回調査までと同様に、一般社団法人日本能率協会に調査実施・分析の一部を委託し、DM 便による調査依頼と、ウェブ方式でのアンケート調査という調査形態で実施した。回答率は 18.4%と、第 10 回調査と比較して 1.2 ポイント低下した。なお、アンケート調査に加え、一部企業については第 10 回調査までと同様にヒアリング調査も実施した。

以下では、それぞれの調査方法の概要の説明は割愛し、調査結果の概要のみ記載する。

2-1 本学在学生（学部生）を対象とする調査について

本学在学生（学部生）を対象とするアンケート調査の結果、今後の本学の教育改善や教育支援の充実を図るうえで、以下のような知見が得られた。

- (1) 本学の志望順位の経年比較における第 2 回調査から第 11 回調査の推移について、高校 3 年 4 月段階、受験時の両方において、第 6 回調査までは、年度が新しいほど第 1 志望率が低下し、第 2 志望以下の合計の割合が上昇していた。第 7 回調査からは逆に第 1 志望率が上昇しており、第 11 回調査でも継続してこの傾向にある。
- (2) 入学時の進路先としての本学の総合的な満足度の経年比較では、第 2 回調査から第 11 回調査の推移では、第 7 回調査までは、入学時点での満足度が上昇していた。

第8回調査では前年度調査より低下した。第9回調査以降は、再び前年度調査より上昇している。

- (3) 入学後現在までの大学生活の総合的な満足度の経年比較についても、(2)と同様の傾向が見られる。すなわち、第7回調査までは、満足度が上昇していたが、第8回では前年度調査より満足度が低下し、第9回調査以降は、前年度調査より満足度が上昇している。特に第11回調査における「大変満足」「ある程度満足」の合計の割合は、これまでの調査において最も高い割合となっている。
- (4) 入学時に本学へ期待していたことは、本調査開始以来9年間一貫して、「専門的な学問を修得することへの期待」が最も高く、「将来の目標や夢を発見することへの期待」「資格を取ることへの期待」が続いている。
- (5) 入学時に期待していた項目に対する入学後の所感では、第2回から第7回までは、「期待以上だった」「期待通りだった」「まずまず期待通りだった」の合計の割合はやや上昇傾向にあったが、第8回調査ではこれが下降に転じた。特に「期待以上だった」「期待通りだった」の合計の割合は、調査実施以降初めて前年度よりも低くなっていた。また、「期待以上だった」の比率は、第6回以降低下傾向にあり、第4回調査の水準まで低下していた。第9回調査以降は、これらは全てポジティブな方向に変化し、「期待以上だった」「期待通りだった」「まずまず期待通りだった」のそれぞれの割合に加え、合計の割合も、前年度をそれぞれ上回り、第11回調査では、過去最高の割合となっている。
- (6) 大学生活上の18項目に対する満足度について、全18項目において、第10回調査よりも満足度が上昇している。
- (7) 入学後現在までの大学生活での成長実感の経年比較では、「とても得られたと思う」と「まずまず得られたと思う」の合計の割合の順序について、第6回調査で初めて成長実感が4項目中1位となった「教養の広がり」は、第7回調査では「専門性の向上」と順位が入れ替わり2位となった。第8回調査では再び1位となり、その後第10回調査まで継続して1位であった。第11回調査では4年ぶりに「専門性の向上」が逆転して1位となった。ただし、両者の割合の差異は第7回調査以降1ポイント未満であり、常に拮抗している。
- (8) 入学後現在までの大学生活を経験して、本学が社会から信頼される良い大学だと思うかという質問に対し、「大変信頼できる」と「ある程度信頼できる」の合計の割合の経年比較では、第9回調査以降は、「大変信頼できる」「ある程度信頼できる」の合計の割合は上昇傾向となったが、「大変信頼できる」の割合は、第10回調査では、第9回調査より僅かながら低下していた。第11回調査では、第10回調査に比較して、「大変信頼できる」「ある程度信頼できる」の合計の割合、この両者のそれぞれの割合共に上昇した。

- (9) 学生生活の不安に関しては、第8回調査から加えた設問であるが、不安が選択される割合が高いものから順に「授業についていけるかという不安」(34.2%)、「経済的な不安」(28.4%)、「友人関係をうまく作れるかという不安」(19.6%)と、ここまで約20%を超えており、概ね5人に1人程度か、それ以上の者が選択していることがわかる。この傾向は第10回調査とほぼ同様の結果である。
- (10) 第10回調査から加えた設問である本学で開催されている諸活動への参加状況については、参加者側としては、約5人に4人の者が「鴨台祭」を始め、様々な活動に参加していた。一方で、運営者側としては、約4人に1人の者が様々な活動に参加していた。この両者の割合は、共に第10回調査より大きい。

2-2 本学大学院生を対象とする調査について

本学大学院生を対象とするアンケート調査の結果、今後の本学の教育改善や教育支援の充実を図るうえで、以下のような知見が得られた。

- (1) 大学院に進学した理由について、第10回調査まで最も割合の大きかった「研究への情熱／興味のため」が、第11回調査では2番目となり、「専門知識やスキルの獲得のため」と逆転した。
- (2) 入学時の進路先としての満足度と入学後現在までの総合的な満足度について、両者共に3回の調査を通して下降傾向であることがわかる。また、両者を比較すると、入学時の進路先としての満足度よりも入学後現在までの総合的な満足度の方が低いことがわかる。
- (3) 自分自身の研究の満足度について、3回の調査では「大変満足」の割合は横ばいであるが、「ある程度満足」を加えた割合はやや下降傾向にある。「どちらでもない」は20%前後で推移している。第11回調査は前回の第10回調査と比較して、ネガティブな回答の合計が増加している。
- (4) 「指導教員との関係」「研究に必要なリソース（施設、機器、データなど）」の満足度は、ポジティブな回答がそれぞれ約9割、約8割前後と3回の調査を通して、高い満足度を示している。「学費や奨学金のサポート」については、3回の調査を通して、「指導教員との関係」「研究に必要なリソース（施設、機器、データなど）」の満足度ほど大きくはないが、ポジティブな回答が上昇傾向にある。一方で、「就活やキャリア支援」は4つの事項の中では最もポジティブな回答の割合が低く、3割に満たない。
- (5) 卒業後の進路希望について最も選択されているものは、第9回調査では「進路その他」(38.3%)であったが、第10回調査では「学術研究者としてのキャリア」(35.7%)、と、第11回調査では「研究者ではなく専門的な知識を活かした一般的な企業への就職」(28.3%)と、3回の調査で結果の傾向が異なっている。
- (6) アカデミックなコミュニティや交流の場の充実度については、3回の調査におけるポジティブな回答の合計の割合は殆ど変化なく、6割を超えている。一方で、ネガティブ

な回答の合計の割合が依然として 10%を超えていることには、今後も注視する必要がある。

(7) 留学や国際交流の機会の充実度について、ポジティブな回答の合計の割合は第 9 回調査の 12.8%から第 10 回調査では 26.8%に上昇したが、第 11 回調査ではやや下降した。また、ネガティブの回答の合計の割合は、第 10 回調査と比較して大きくなった。

(8) 大学院生活においてメンタルヘルスのケアを重視する学生の割合（「非常に重視している」「重視している」の合計の割合）は、3 回の調査で上昇している。特に、「非常に重視している」の割合は 3 回の調査で、第 9 回調査 31.9%、第 10 回調査 39.3%、第 11 回調査 41.5%と上昇傾向にある。メンタルヘルスのケアは、本学の大学院生にとって、ますます重視すべき事項になっている。なお、ストレスや不安の要因では、第 10 回調査までは「修士論文や博士論文の執筆」であったが、第 11 回調査では、初めて「就職やキャリアに対する不安」が最も大きな割合（34.0%）となった。

(9) 大学院において必要な能力・資質について、第 9 回調査の上位 3 項目は、「専門的知識」、「コミュニケーション能力」、「課題設定・検証能力」、第 10 回調査では、「論理性」、「課題設定・検証能力」、「専門的知識」と「コミュニケーション能力」（同率）、第 11 回調査では、「専門的知識」、「論理性」、「課題設定・検証能力」であった。第 9 回調査、第 10 回調査で上位 3 位以内であった「コミュニケーション能力」は、第 11 回調査では 4 位となっており、3 回の調査の傾向は一定しない。

(10) 大学院入学後、現在までの教育課程を通じて、所属する研究科専攻のディプロマ・ポリシー（DP）に基づく能力・資質等が身に付いたかについては、3 回の調査を通して、概ね 8 割を超える者が「知識・技能」「関心・意欲・態度」「思考力・判断力・表現力」は身に付いたと回答している。また、3 回の調査を通して、この 3 つの能力・資質では、「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力」よりも「関心・意欲・態度」の身に付いた割合の方が高いと回答されている。

2-3 企業等を対象とする調査について

企業・団体・官公庁等を対象とするアンケート調査の結果、今後の本学の教育改善や教育支援の充実を図るうえで、以下のような知見が得られた。

(1) 本学卒業生が企業等の人材ニーズや期待に込えているかという設問に対しては、「十分込えている」「ある程度込えている」合わせて 91.5%と、企業等がポジティブに評価している。一方で、不足しているというネガティブな評価の合計は 3.0%であった。前年度調査からポジティブな評価、ネガティブな評価ともに微減した。

(2) 本学卒業生の能力についての設問に対しては、「総合的に見てかなり高いと感じる」「総合的に見て、やや高いと感じる」合わせて 72.6%と、企業等がポジティブに評価している。一方で、低いという評価は合計で 4.5%であった。前年度調査から「高い」の割合は 10 ポイント以上高くなり、「低い」の割合も微増した。

(3) 本学の就職支援活動への所感については、「大変熱心だと感じる」「ある程度熱心だと感じる」合わせて 64.5%がポジティブに評価していた。前年度調査では、ポジティブの割合の合計が 62.3%であったため微増した。

(4) 本学卒業生の採用意向については、「他の大学よりも、大変積極的に考えたい」「他の大学よりも、ある程度積極的に考えたい」合わせてポジティブな回答が 61.5%と、前年度と比較して上昇し、6 割を超えた。

(5) 企業等が考える新卒採用時の重要度と本学学生の印象では、多くの項目で重要度より印象の方の割合が低い傾向となった。特に今年度、差が 20 ポイント以上ある項目は 0 となった。差が 10 ポイント以上ある項目は「リーダーシップや部下指導」、「仕事全般への幅広い興味」、「柔軟な対処」、「相手の立場になって行動」、「コミュニケーション能力」の 6 項目であった。一方で、重要度よりも本学学生の印象がポジティブな項目は 4 項目と 2024 年度より 1 項目増え、順に、「専門知識」、「幅広い教養」、「人柄が温厚」、「外国語や国際感覚」であった。

(6) 本学が取り組んでいる就職支援活動をまとめた 8 項目中、有用度のポジティブの割合が 70%を超えるのは、高い項目から順に「企業・業界研究」(85.5%)、「キャリア・アドバイザーによる個別相談」(80.5%)、「インターンシップ」(77.0%)、「面接試験対策」(74.5%)であった。これまでの調査で一貫して「企業・業界研究」の有用度が、常に最も高いという傾向にある。

(7) 本学との交流に関する所感については、これまで実績がない企業等の場合、「今後、検討したい」は半数の項目で割合が増加した。昨年度に比して、増加した項目は、多いものから順に、「本学学生のアルバイト募集や雇用」、「PBL 等の教育協力」、「本学への講師等の派遣」、「本学教員の講師派遣」、「本学の施設（図書館・教室等）の利用」であり、その他項目は減少した。

(8) 本学採用担当者向け HP が「他の大学と比較して、総合的にみて、利便性が高い」という設問に対し、「大変そう思う」31.9%、「ややそう思う」46.0%と合計 77.9%がポジティブに評価している。前年度調査のポジティブな評価の合計の割合 66.7%から 10 ポイント以上増加した。

(9) 企業等の新たな採用形態の状況について、前年度調査との比較では、昨年度に引き続き、全項目でポジティブな回答の合計割合が増加した。その中でも、「広義のリファラル採用」、「ダイレクトリクルーティングや逆求人採用等の実施」、「通年採用の実施」は、それぞれ 5 ポイント以上増加した。企業側の積極的な採用姿勢が窺われる結果と言える。

(10) 企業等の新たな採用形態の今後の展望については、昨年度に引き続き「インターンシップを活用した採用活動の実施」のみ、ポジティブな回答の合計割合が 15.0 ポイント減少した。この減少傾向は直近の 3 年度継続している。一方で、他の全ての項目では、「ダイレクトリクルーティングや逆求人採用等の実施」(26.6 ポイント)、「通年採用の実

施」(5.9 ポイント)、「勤務地域等がある程度限定した採用形態の実施」(4.5 ポイント)、
「広義のリファラル採用の実施」(3.5 ポイント)、と、ポジティブな回答の合計割合が増
加した。企業側の新たな人材採用形態への積極的な姿勢が看取される結果となった。

【教学 IR 推進部会（令和 7 年度）】

部会長	学長	神達知純
副部会長	副学長	林田康順
委 員	副学長	高橋正弘
	学長補佐	佐々木大樹
	学長補佐	高柳直弥
	学部長（代表）	新保祐光
	EM 研究所所長	福島真司
	EM 研究所副所長	日下田岳史
	理事長室部長	加藤真紀子
	法人秘書課課長	福中裕之
	法人秘書課	藤倉惇志
	法人秘書課・EM 研究所	和田浩行

教学 IR 推進部会 TSR 総合調査 WG 開催日時（合計 7 回開催）

令和 7 年度： 第 1 回 5 月 21 日、 第 2 回 6 月 6 日、 第 3 回 7 月 31 日、
第 4 回 10 月 15 日、第 5 回 12 月 16 日、 第 6 回 2 月 25 日、
第 7 回 3 月 31 日